『なぜ打つのですか』（ヨハネの福音書 18 章 12-24 節） 2023.2.12.

＜はじめに＞ ローマ兵士とユダヤ人下役たちは、イエスを捕らえて大祭司の家に連行します。その年の大祭司はカヤパ、アンナスはその舅で(13)、両者の館は同じ敷地内と思われます。アンナス一族は大祭司職を歴任し、かつて大祭司職に就いた者も「大祭司」(19)と呼ぶ習慣がありました。

Ⅰ　なぜイエスを捕らえたのか(12-14)

①カヤパの提案(14⇒11:47-53)

兵士や下役は、大祭司の指示でイエスを捕らえました(3)。その背後にカヤパの提案がありました(14⇒11:50)。当時ユダヤ人指導者はローマから自治権をある程度与えられていましたが、イエスの台頭を自らの立場の危機と感じた彼らはイエス殺害へと傾きます。

②呉越同舟(12)

ローマとユダヤ間には、植民地にある緊張関係が根底にありました。ローマはユダヤの安定支配を願い、ユダヤ人指導者は支配特権は手放したくありません。そこで両者は手を結んで、見かけの安定を維持し、イエスへの対処では共闘しています。

③保身のため

自分の立場を危うくする者を排除するのに、相手を失脚させるのは常道手段です。捕らえられ縛られた姿は、追随者を失望させます。ユダヤ人指導者にとってイエスを捕らえることが最優先の目的で、理由は後付けです。ユダの裏切り(3)はその機会を提供します。

Ⅱ　アンナスの尋問(19-24)

①なぜ尋ねるのですか(19-21)

大祭司がイエスを尋問したのは、イエスの真実を知りたかったのではありません。イエスは公然と話し、聴衆も多くいて、証拠集めに事欠きません。この尋問はイエスを捕らえ訴える口実探しです。鼻から悪人と決めつけてかかり、イエスは決然と反論されます。

②なぜ打つのですか(22-24)

傍にいた下役の一人がイエスの受け答えに激昂して平手打ちします。大祭司と犯罪人、立場を弁えよ、と。イエスはこれにも毅然と反論されます。悪いなら証拠を示すように求める声に、アンナスは答えず、縛られたままイエスをカヤパのもとに送ります。

③大祭司の役割

罪を犯した者をとりなし、犠牲と祈りをささげて、神に赦しを乞い願うのが大祭司です。「主は人がいないのを見て、執り成す者がいないことに唖然とされた。そこで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義を支えとされた」(イザヤ 59:16)。誰が真の大祭司ですか。

Ⅲ　悪意さえ用いる神(11:50-53)

①隠された神の計画(11:51-52)

カヤパ提案のイエス殺害計画は実行に移され、着々と進行します。人間側の絵の裏には神の御計画がありました。イエスは自らユダヤ国民のためだけでなく、散らされている神の子らを一つに集めるためにも、死に向かわれていたと聖書は証しします。

②主導権を持つ神

カヤパのことばは、彼が意図していない預言でした。ここに神が悪意を抱く反対者さえ、ご自身の御手の中で自在に用いられていることを見ます。神は、悪が勝ち誇るようなひとときを与えたとしても、圧倒されたのでも投げ出されたのでもありません。

③わたしはすでに世に勝ちました(16:33)

十字架の物語には、人の悪意と弱さが随所に見られます。それらによってイエスは苦しめられ殺されますが、神の救いの御計画は十字架と復活によって実現します。私たちの主はすでに世に勝った御方です。この主に平安と勇気を得て、私たちも歩むのです。

＜おわりに＞ 私たちを取り囲むこの世は、逆風を吹き付けて来ることが多々ありましょう。しかし、主イエスは私たちのために執り成してくださり、また救いの先駆けとして歩まれました。このキリストを信じ仰ぎ、その足跡に私たちも倣わせていただきましょう(Ⅰペテロ 2:19-25)。(H.M.)